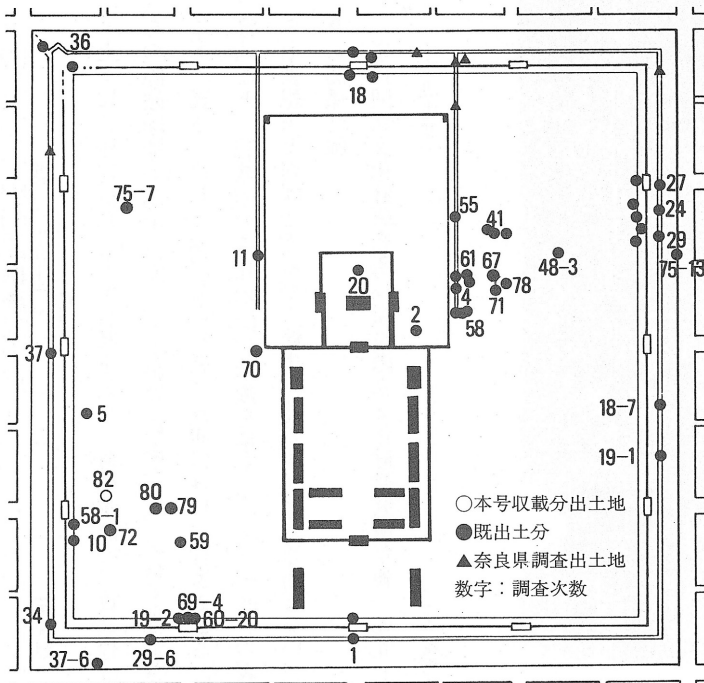


奈良・藤原宮跡

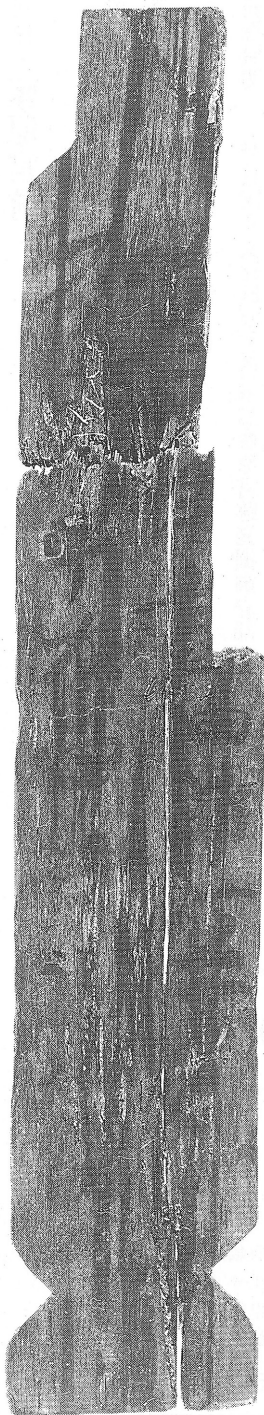
- 1 所在地 奈良県橿原市縄手町
 - 2 調査期間 第八二次調査 一九九六年(平8)一〇月～一九九七年二月
 - 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
 - 4 調査担当者 代表 猪熊兼勝
 - 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
 - 6 遺跡の年代 七世紀末～八世紀初期
 - 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
道路造成に伴う事前調査であり、調査面積は一八〇〇㎡である。調査区は藤原宮の西面南門の北東の西方官衙南地区に位置し、昨年報告した第八〇次調査区の西にあたる。これまでこの周辺における調査では、藤原宮期の遺構の他に、藤原宮直前期の宮内先行道路、さらに下層には弥生・古墳時代の遺構が重複して検出されている。今回検出した遺構は①古墳時代、②藤原宮直前期～藤原宮期、③藤原宮期以降に大別される。
- ②の時期の遺構は宮内先行条坊に属する西二坊間路、五条大路およびそれらの側溝などである。西二坊間路は、以前に北方の調査で検出しているが、今回は南北八六m分を東西両側溝とともに確



藤原宮木簡等出土地点略図

認した。道路の規模は路面幅で五・四一六・五m、側溝心間で六・二一六・八mである。五条大路は、その北側溝を西二坊間路西側溝との合流点から西六m分を検出したが、南側溝は発掘区外となる。なお、五条大路の幅については、東の第八〇次調査で、路面幅約七・五m、側溝心間で約八・五mという数値を得ている。

木簡が出土したのは、西二坊間路東側溝SD三二〇六からである。SD三二〇六は、溝幅が約一m、深さは発掘区北端で約一・二mと最も深く、南にゆくにしながら浅くなる。溝内の土層は、上半部が青灰色ないし灰褐色の砂質土で、堅くしまっており、溝の埋め立て土と推定した。下半部は、細砂混じりの青灰色ないし暗灰色の粘質土で、流水時の堆積である。木簡は、SD三二〇六の発掘区北端付近の、溝底に近い暗灰色粘質土から出土した。同層からの伴出遺物には、藤原宮直前期に属する土師器と須恵器がある。



8 木簡の釈文・内容

南北溝SD三二〇六

(1) $\left[\begin{array}{c} \sim \\ \square\square\square\square \\ \square\square\square\square \\ \square\square\square\square \\ \square\square\square\square \end{array} \right]$ [知夫利カ] 評由羅五十戸
 $\left[\begin{array}{c} \square\square\square\square \\ \square\square\square\square \\ \square\square\square\square \\ \square\square\square\square \end{array} \right]$ [伊伊] [鮮カ]

192×33×4 031

上下に二片に折れ、上半右側を欠く。荷札木簡で、貢進地は、のちの隠岐国智夫郡由良郷（『和名抄』）にあたる。杉材と推定されること、長さに比して幅が広い形態、表面のみに二行書きするという書式など、隠岐国の荷札木簡の特徴を備えている。「評」の表記から七世紀末と判断できるが、伴出土器の年代とも矛盾しない。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九九七・Ⅲ』

(一九九七年)

(寺崎保広)